

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1

クイックスタートガイド



Part No: E35737-01
2012年5月

Copyright ©2012, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	5
関連ドキュメント	5
ドキュメントのフィードバック	6
製品のダウンロード	6
Oracle ILOM 3.1 ファームウェアのバージョン番号方式	7
サポートとアクセシビリティ	8
Oracle ILOM 3.1 - クイックスタート	9
出荷時のデフォルト設定	10
必須のセットアップタスク	11
オプションのセットアップタスク	17
日常的な管理タスク	23
通常の保守タスク	36
初期設定の FAQ	44

このドキュメントの使用法

このガイドでは、Oracle Sun サーバーと Oracle Sun ブレードシャーシシステムをリモート管理できるように、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ファームウェアを起動および実行する方法について説明します。このガイドでは Oracle ILOM をはじめて使用するときに必要な詳細情報のみを提供しているため、より掘り下げた情報については、「関連情報」セクションに記載されているその他のガイドを参照してください。

このガイドは、Oracle ILOM 3.1 ドキュメントライブラリのその他のガイドと一緒に使用してください。このガイドは、技術者、システム管理者、Oracle 認定サービスプロバイダ、およびシステムハードウェアの管理経験があるユーザーを対象としています。

- 5 ページの「関連ドキュメント」
- 6 ページの「ドキュメントのフィードバック」
- 6 ページの「製品のダウンロード」
- 7 ページの「Oracle ILOM 3.1 ファームウェアのバージョン番号方式」
- 8 ページの「サポートとアクセシビリティ」

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31
システム管理、単一システム管理 (SSM) のセキュリティ、および診断のドキュメント	www.oracle.com/technetwork/documentation/sys-mgmt-networking-190072.html
Oracle HardwareManagement Pack 2.2	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp

注意: 使用している Sun サーバープラットフォームに固有の Oracle ILOM 3.1 のドキュメントについては、サーバーに提供されている管理ガイドの Oracle ILOM のセクションを参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントについてのフィードバックをお寄せください:

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

製品のダウンロード

各 Sun サーバーまたは Sun ブレードシャーシシステムの Oracle ILOM 3.1 ファームウェアの更新は、My Oracle Support (MOS) Web サイトからダウンロードできるスタンドアロンのソフトウェア更新プログラムによって入手できます。このようなソフトウェア更新プログラムを MOS Web サイトからダウンロードするには、次の手順を参照してください。

▼ 製品のソフトウェアおよびファームウェアのダウンロード

- 1 <http://support.oracle.com> にアクセスします。
- 2 **My Oracle Support** にサインインします。
- 3 ページの上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
- 4 「検索」タブの上部にある「パッチ検索」パネルで、「製品またはファミリー(拡張検索)」を選択します。
- 5 「対象製品」リストボックスで、製品名の全体または一部を入力し、一致する製品のリストがリストボックスに表示されたら該当する製品名を選択します。
製品名の例: Sun Fire X4470 M2 Server または Sun Enterprise SPARC T5120。
- 6 「リリース」リストボックスで
 - a. 「リリース」リストボックスの下向き矢印をクリックして、一致する製品のフォルダのリストを表示します。
1つまたは複数の製品フォルダのアイコンのリストが表示されます。
 - b. 製品フォルダのアイコンの横にある三角形(>)をクリックして、ソフトウェアリリースのリストを表示します。
 - c. 目的のソフトウェアリリースを選択します。
例: X4470 M2 SW 1.4 または Sun SPARC Enterprise T5120。

- 7 「検索」をクリックします。
「パッチ検索結果」画面が表示され、パッチ名のリストと説明が示されます。
- 8 「パッチ検索結果」画面で、目的のパッチ名を選択します。
例: X4470 M2 Server SW 1.4.ILOM and BIOS (Patch) または Firmware SPARC Enterprise T5120 Sun System Firmware 7.1.3.2。
- 9 パッチ名の選択で、次のいずれかのアクションをクリックします:
 - README - 選択したパッチの Readme ファイルを開きます。
 - 計画に追加 - 選択したパッチを新しい計画または既存の計画に追加します。
 - ダウンロード - 選択したパッチをダウンロードします。
 - コピー - 選択したパッチの詳細をメモリーにコピーします。

Oracle ILOM 3.1 ファームウェアのバージョン番号方式

Oracle ILOM 3.1 では、使用しているサーバーまたはシャーシ監視モジュール (CMM) で実行しているファームウェアバージョンを識別しやすいファームウェアバージョンの番号方式を使用しています。この番号方式では、5つのフィールドがある文字列を使用しています。たとえば、a.b.c.d.e となり、ここでは:

- a - Oracle ILOM のメジャーバージョンを示します。
- b - Oracle ILOM のマイナーバージョンを示します。
- c - Oracle ILOM の更新バージョンを示します。
- d - Oracle ILOM のマイクロバージョンを示します。マイクロバージョンは、プラットフォームまたはプラットフォームのグループ単位で管理されます。詳細は、使用しているプラットフォームの製品ノートを参照してください。
- e - Oracle ILOM のナノバージョンを示します。ナノバージョンは、マイクロバージョンの増分反復です。

たとえば、Oracle ILOM 3.1.2.1.a の意味は、次のとおりです:

- Oracle ILOM 3 はメジャーバージョンです
- Oracle ILOM 3.1 はマイナーバージョンです
- Oracle ILOM 3.1.2 は2つ目の更新バージョンです
- Oracle ILOM 3.1.2.1 はマイクロバージョンです
- Oracle ILOM 3.1.2.1.a は3.1.2.1のナノバージョンです

ヒント - 使用している Sun サーバーまたは CMM にインストールされている Oracle ILOM ファームウェアバージョンを確認するには、Web インタフェースで「System Information」 > 「Firmware」の順にクリックするか、コマンド行インタフェースで `version` と入力します。

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた電子的なサポートへのアクセス	http://support.oracle.com 聴覚障害の方へ: http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについて	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html

Oracle ILOM 3.1 - クイックスタート

説明	リンク
出荷時のデフォルト	<ul style="list-style-type: none">10 ページの「出荷時のデフォルト設定」
必須のセットアップ	<ul style="list-style-type: none">12 ページの「Oracle ILOM に接続する」13 ページの「Oracle ILOM にログインする」14 ページの「Oracle ILOM に新しいユーザーを追加する」
オプションのセットアップ	<ul style="list-style-type: none">18 ページの「管理対象デバイスの識別ラベルを設定する」19 ページの「デフォルトのネットワーク接続設定を変更する」22 ページの「リモート KVMs を使用してソフトウェアをインストールする」
日常的な管理	<ul style="list-style-type: none">24 ページの「システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する」25 ページの「障害メッセージを手動でクリアする」28 ページの「イベントを管理しログエントリを監査する」30 ページの「管理対象デバイスの消費電力メトリックを表示する」32 ページの「管理対象デバイスの電力割り当てを表示する」34 ページの「Sun SPARC の電力管理ポリシーを設定する」35 ページの「消費電力の統計と履歴を表示する」

説明	リンク
通常の保守	<ul style="list-style-type: none"> ■ 37 ページの「管理対象デバイスのシステム情報を収集する」 ■ 37 ページの「「Locator」LED を使用して管理対象デバイスを探す」 ■ 39 ページの「管理対象デバイスの電源状態を変更する」 ■ 40 ページの「管理対象デバイスの Oracle ILOM をリセットする」 ■ 41 ページの「管理対象デバイスのファームウェアを更新する」 ■ 43 ページの「リモートシリアルコンソールからホスト OS にログインする」
FAQ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 44 ページの「初期設定の FAQ」

出荷時のデフォルト設定

プロパティ	デフォルト値	参照先
Alert notifications	SMTP クライアント: 有効 警告: 15 の構成可能な警告 消費電力通知: 無効	『構成および保守』の「警告通知の構成」
Connectivity: DNS	Auto DNS via DHCP 有効	『構成および保守』の「デフォルトの接続構成プロパティの変更」
Connectivity: Network	IPv4: DHCP 有効、DHCP Client ID: なし IPv6: ステートレス自動構成有効	『構成および保守』の「デフォルトの接続構成プロパティの変更」
Connectivity: Serial Port	Owner: SP Baud rate: 9600 ボー Flow control: なし	『構成および保守』の「デフォルトの接続構成プロパティの変更」
Date and Time	タイムゾーン: GMT NTP サーバー: 無効 クロック: 未初期化	『構成および保守』の「SP または CMM クロックのプロパティの設定」

プロパティ	デフォルト値	参照先
Management Access	Secure Shell サーバー: 有効 Web および CLI セッション: 15 分でタイムアウト Web HTTP ポート: 80 Web HTTPS サーバー: 有効、ポート 443 Web サーバー: SSLv3、TLSv1 SSL 証明書: デフォルト証明書が提供される WS-MAN 状態: 有効、ポート 8889 IPMI 状態: 有効 SNMP 状態: SNMPv3 有効、ポート 161 バナー状態: 無効	<ul style="list-style-type: none"> 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「SNMP の概要」 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「IPMI を使用したサーバー管理」 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「WS-Management と CIM を使用したサーバー管理」
管理ステーション上の Storage Redirection CLI ソケットポート	ポート: 2121	『構成および保守』の「リモート KVMs コンソールを使用したホストサーバーのリダイレクション」
ユーザー資格: ローカル	ルートアカウントログイン: root ルートアカウントパスワード: changeme ローカルアカウント: 10 の構成可能なアカウント SSH 鍵状態: 有効	<ul style="list-style-type: none"> 『構成および保守』の「ユーザーアカウントの設定および管理」 14 ページの「Oracle ILOM に新しいユーザーを追加する」
ユーザー資格: リモート	LDAP 状態: 無効 LDAP/SSL 状態: 無効 RADIUS 状態: 無効 Active Directory 状態: 無効	『構成および保守』の「ユーザーアカウントの設定および管理」

必須のセットアップタスク

- 12 ページの「Oracle ILOM に接続する」
- 13 ページの「Oracle ILOM にログインする」
- 14 ページの「Oracle ILOM に新しいユーザーを追加する」

注 - このセクションの手順では、Oracle ILOM にアクセスするために必要な必須のセットアップタスクの概要について説明します。これらのタスクの実行に詳細な説明が必要な場合、「関連情報」セクションに記載されているガイドを参照してください。

▼ Oracle ILOM に接続する

次のいずれかの手順を実行して、Oracle ILOM への物理的管理接続を確立します：

- ローカルシリアル管理接続 - 手順 1
- ネットワーク管理接続 - 手順 2

1 ローカルシリアル管理接続の手順

- a. コンソール(ワークステーションまたは端末)とサーバーまたは Sun ブレードシャーシ監視モジュール(CMM)の SER MGT ポート間をシリアルケーブルで接続します。

この物理的接続でサービスプロセッサ(SP)との最初の通信が行われます。端末デバイス通信プロパティを、9600 ボー、8 ビット、パリティなし、1 ストップビットに設定する必要があります。

注 - DTE から DTE の通信で送受信の信号が逆方向になる(転向する)場合、null モデム構成が必要になります。システムに付属するアダプタケーブルを使用して、null モデム構成を実現します。

- b. 端末デバイスと Oracle ILOM SP または CMM の間に接続を作成するには、端末デバイスの **Enter** を押します。

2 ネットワーク管理接続の手順

- a. ネットワークスイッチとサーバーまたは CMM の NET MGT ポートを Ethernet ケーブルで接続します。

Oracle ILOM は、ネットワーク上の IPv4 DHCP サーバーおよび IPv6 ルーターの両方から、Sun サーバー SP または CMM のネットワークアドレスを自動的に学習します。これらのネットワーク設定を変更する必要がある場合は、[19 ページ](#)の「[デフォルトのネットワーク接続設定を変更する](#)」を参照してください。

- b. サーバー SP または CMM に割り当てられている IP アドレスを判定します。
割り当てられている IP アドレスを判定するには、ILOM SP または CMM へのローカルシリアル管理 (SER MGT) 接続を確立し、ILOM にログインしてか

ら、`show` コマンドを使用して `/network` および `/networkipv6` ターゲットの下のネットワークプロパティを表示します。

また、ネットワーク上の DHCP サーバーから IP アドレスを判定することもできます。

参考 関連情報

- 44 ページの「初期設定の FAQ」
- 13 ページの「Oracle ILOM にログインする」
- 19 ページの「デフォルトのネットワーク接続設定を変更する」
- 『構成および保守』の「Oracle ILOM への管理接続の設定とログイン」
- Sun サーバー向け設置ガイド、ケーブルを接続して電源を投入する
- Sun サーバー向け管理ガイド、x86 BIOS 設定を構成する

▼ Oracle ILOM にログインする

Oracle ILOM にログインするには、Oracle ILOM に確立された物理的管理接続に基づいて次の手順のいずれかを実行します:

- ローカルシリアル管理接続 - 手順 1
- Web ブラウザベースネットワーク管理接続 - 手順 2
- コマンド行 SSH ネットワーク管理接続 - 手順 3

注 - 次の手順は、最初に ILOM にログインするときに `root` アカントを使用することを前提としています。このアカウントでは、Oracle ILOM のすべての機能またはコマンド用に管理権限 (読み取りおよび書き込み) が組み込まれています。管理対象デバイスへの承認されていないアクセスを防止するために、各サービスプロセッサ (SP) またはシャーシ監視モジュール (CMM) で `root` アカントパスワード (`changeme`) を変更することをお勧めします。

1 ローカルシリアル管理接続 - ログイン手順

- Oracle ILOM ログインプロンプト (->) で、アカウントに `root`、パスワードに `changeme` を入力します。

2 Web ブラウザベースネットワーク管理接続 - ログイン手順

- Web** ブラウザに `http://ILOM_SP_or_CMM_ipaddress` と入力し、**Enter** を押します。Oracle ILOM ログインダイアログが表示されます。
- アカウントに `root`、パスワードに `changeme` を使用して Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。Oracle ILOM Web インタフェースが表示されます。

3 コマンド行SSHネットワーク管理接続-ログイン手順

- a. Oracle ILOM CLI への SSH セッションを確立するには、端末ウィンドウを開きます。
- b. デフォルト root アカウントを使用して Oracle ILOM にログインするには、次のように入力します:

```
$ ssh root@ILOM_SP_or_CMM_ipaddress
```

Oracle ILOM から root パスワードを求められます。
- c. パスワードプロンプトで **changeme** と入力します。
Oracle ILOM CLI プロンプト (->) が表示されます。

参考 関連情報

- 12 ページの「Oracle ILOM に接続する」
- 14 ページの「Oracle ILOM に新しいユーザーを追加する」
- 『構成および保守』の「Oracle ILOM サーバー SP または CMM へのログイン」

▼ Oracle ILOM に新しいユーザーを追加する

始める前に

- Oracle ILOM では最大 10 のローカルユーザーアカウントを作成できます。
Active Directory、LDAP、または RADIUS 用に Oracle ILOM を構成する手順については、この手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。
- サーバー SP または CMM のユーザーアカウントの管理には、CLI、Web インタフェース、SNMP インタフェース、または IPMI インタフェースを使用できます。次の手順では、Web インタフェースと CLI を使用してこのタスクを実行する方法を説明しています。SNMP または IPMI インタフェースを使用してこのタスクを実行する手順については、これらの手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。
- 次の手順は、root ユーザーとして Oracle ILOM にログインしていることを前提としています。root ユーザーのログイン手順については、13 ページの「Oracle ILOM にログインする」を参照してください。

新しいローカルユーザーアカウントを Oracle ILOM に追加するには、次の手順のいずれかを実行します:

- 新しいローカルユーザーアカウントの追加 - Web による手順 1
- 新しいローカルユーザーアカウントの追加 - CLI による手順 2

- 1 新しいローカルユーザーアカウントの追加 - Web による手順
 - a. Oracle ILOM の Web インタフェースで、「ILOM Administration」 > 「User Management」 > 「User Accounts」をクリックします。
 - b. 「Users」テーブルで「Add」をクリックします。
「Add User」ダイアログボックスが表示されます。
 - c. ユーザーアカウントの名前と新しいパスワードを指定し、ユーザー役割プロファイルを選択します。
Oracle ILOM では、Web インタフェースで Administrator、Operator、または Advanced という 3 つのユーザー役割プロファイルからいずれかを選択できます。各ユーザー役割プロファイルについては、例 1 を参照してください。
 - d. 新しいユーザーアカウントプロパティを追加するには、「Save」をクリックします。
- 2 新しいローカルユーザーアカウントの追加 - CLI による手順
 - a. Oracle ILOM CLI プロンプトで、次のいずれかを入力します:
-> `create /SP/users/username password=password`
-> `create /CMM/users/username password=password`
例:
-> `create /SP/users/user5`

Creating
user...

Enter
new password: *****

Enter
new password again: *****

Created
/SP/users/user5
 - b. ユーザーアカウントに役割を割り当てるには、次のいずれかを入力します:
-> `set /SP/users/username role=aucr`
-> `set /CMM/users/username role=aucr`
例:

サーバー SP の user5 にすべての読み取りおよび書き込み権限を与えるには、次のように入力します:

```
-> set /SP/users/user5 role=aucro
```

```
Set
'role' to 'aucro'
```

注 - aucro は、Administrator (管理者) プロファイルの設定と同等です。

Oracle ILOM でサポートされるユーザー役割と権限の詳細は、次の表を参照してください。

例 1 Oracle ILOM ユーザーのプロファイルと役割の説明

割り当て可能なプロファイルと役割	付与される権限
Administrator (管理者)	Administrator プロファイルは次の定義済みユーザー役割の権限を付与します: <ul style="list-style-type: none"> ■ Admin (a) ■ User Management (u) ■ Console (c) ■ Reset and Host Control (r) ■ Read-Only (o)
Operator (オペレータ)	Operator プロファイルは次の定義済みユーザー役割の権限を付与します: <ul style="list-style-type: none"> ■ Console (c) ■ Reset and Host Control (r) ■ Read-Only (o)
Advanced Roles (a u c r o s)	Advanced Roles プロファイルは Web インタフェースからのみ構成できます。このプロファイルを使用して、次の定義済みユーザー役割のいずれかの権限を付与します: <ul style="list-style-type: none"> ■ Admin (a) ■ User Management (u) ■ Console (c) ■ Reset and Host Control (r) ■ Services (r) ■ Read-Only (o)
admin (a)	Admin (a) 役割は (有効のとき)、すべての Oracle ILOM システム管理機能への読み取りおよび書き込み権限を付与しますが、Admin (a) 役割にこれらのユーザー役割を追加で有効にする必要がある機能は例外です: User Management (u)、Reset and Host Control (r)、Console (c)、および Services (s)。
user (u)	User Management (u) 役割は (有効のとき)、すべての Oracle ILOM ユーザー管理認証機能への読み取りおよび書き込み権限が付与されます。

割り当て可能なプロファイルと役割	付与される権限
console (c)	Console (c) 役割は (有効のとき)、これらのリモートコンソール管理機能を実行するための読み取りおよび書き込み権限を付与します: リモートコンソールのロックオプション、SP コンソール履歴ログオプション、Oracle ILOM リモートコンソールの起動と使用、Oracle ILOM Storage Redirection CLI の起動と使用。
reset and host control (r)	Reset and Host Control (r) 役割は (有効のとき)、これらのホスト管理機能を実行するための読み取りおよび書き込み権限を付与します: ブートデバイス制御のホスト、診断ユーティリティの実行と構成、SP のリセット、CMM のリセット、サブコンポーネントサービス処理、障害管理処理、SPARC TPM 管理処理、および SNMP MIB ダウンロード操作。
read-only (o)	Read-Only (o) ユーザー役割は、すべての Oracle ILOM 構成プロパティの状態を表示し、個々のユーザーアカウントに割り当てられたアカウントパスワードとセッションタイムアウトプロパティを変更するための読み取り専用権限を付与します。
service (u)	Services (s) ユーザー役割は (有効のとき)、オンサイトサービスが必要な場合に Oracle サービスエンジニアを支援する読み取りおよび書き込み権限を付与します。
administrator (auro)	これらすべてのユーザー役割の組み合わせ (auro) は (有効のとき)、Oracle ILOM で構成をバックアップおよび復元する機能を実行するための読み取りおよび書き込み権限を付与します。

参考 関連情報

- 『構成および保守』の「ユーザー資格の管理」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「SNMP を使用したユーザーアカウントの管理」

オプションのセットアップタスク

- 18 ページの「管理対象デバイスの識別ラベルを設定する」
- 19 ページの「デフォルトのネットワーク接続設定を変更する」
- 22 ページの「リモート KVMs を使用してソフトウェアをインストールする」

注- このセクションの手順では、Sun サーバーまたは CMM を設定するときに、場合によって実行する必要があるオプションのセットアップタスクの概要について説明します。これらのタスクの実行に詳細な説明が必要な場合、「関連情報」セクションに記載されているガイドを参照してください。

▼ 管理対象デバイスの識別ラベルを設定する

始める前に

- Oracle ILOM で管理対象デバイスのシステム識別ラベルを設定するには、Admin (a) 役割権限が必要です。

Oracle ILOM サーバー SP または CMM の CLI または Web インタフェースを使用して、ホスト名、システム識別子、システム連絡先、およびシステム場所に識別ラベルを割り当てることができます。

- 識別ラベルを設定する - Web による手順 1
- 識別ラベルを設定する - CLI による手順 2

1 識別ラベルを設定する - Web による手順

- a. SP または CMM の Web インタフェースで、「ILOM Administration」 > 「Identification」をクリックします。

「Identification Information」ページが開き、次を指定するためのフィールドが表示されます:

- **Hostname** – 管理対象デバイスのホスト名を入力します。ホスト名は最大 60 文字まで含めることができます。英字で始める必要があり、英数字、ハイフン、およびアンダースコア文字のみを含める必要があります。
- **System Identifier** – 管理対象デバイスのシステム識別子を入力します。システム識別子には、標準的なキーボードのキーを使用して最大 60 文字まで含めることができます (引用符は除きます)。
- **System Contact** – 管理対象デバイスのシステム連絡先を入力します。システム連絡先は、標準的なキーボードのキーを使用したテキスト文字列で構成できます (引用符は除きます)。
- **System Location** – 管理対象デバイスのシステム場所を入力します。システム場所は、標準的なキーボードのキーを使用したテキスト文字列で構成できます (引用符は除きます)。
- **Physical Presence Check** – SP および CMM ではこのオプションはデフォルトで有効になっています。このオプションが有効になっている場合は、ILOM パスワードを復元したりその他のセキュリティー関連処理を実行したりするには、物理システムの「Locator」ボタンを押す必要があります。

- b. 「Save」をクリックして設定を有効にします。

2 CLIによる手順 - 識別ラベルを設定する

- a. サーバー SP または CMM に割り当てられた識別ラベルを表示するには、次のように入力します:

```
-> show /SP|CMM
```

- b. サーバー SP または CMM の識別ラベルを設定するには、次のように入力します:

- -> set /SP|CMM hostname=*text_string*
- -> set /SP|CMM system_identifier=*text_string*
- -> set /SP|CMM system_contact=*text_string*
- -> set /SP|CMM system_location=*text_string*
- -> set /SP|CMM check_physical_presence=true|false

ここでは:

SP|CMM が表示されたら、set /SP または set /CMM と入力します

true|false が表示されたら、有効にするには true、無効にするには false と入力します

参考 関連情報

- 『構成および保守』の「システム識別情報の割り当て」

▼ デフォルトのネットワーク接続設定を変更する

始める前に

- この手順は、Oracle ILOM サーバー SP または CMM へのローカルまたはネットワーク管理接続が確立されていることを前提としています。Oracle ILOM への物理ローカルまたはネットワーク接続を確立する手順については、[12 ページの「Oracle ILOM に接続する」](#)を参照してください。
- Oracle ILOM には、IPv4 DHCP および IPv6 デフォルトステートレスネットワーク設定が標準装備されています。

IPv4 のネットワークプロパティが DHCP に設定されているときは、SP または CMM は DHCP IPv4 サーバーから受信した DHCP 通知メッセージを使用して DHCP IP アドレスを自動的に構成します。

IPv6 の自動構成プロパティが「Stateless」に構成されているときは、SP または CMM は IPv6 ルーター通知メッセージを使用して動的アドレスを自動的に構成します。さらに、SP または CMM はルーティングできない Link-Local IPv6 アドレスを常に生成します (ローカルサブネットから到達可能になります)。

- Oracle ILOM でネットワーク設定を変更するには、Admin (a) 役割権限が必要です。
- CLI または Web インタフェースを使用するか SNMP クライアントを使用することで、サーバー SP または CMM ネットワーク設定を Oracle ILOM で変更できます。CMM または SNMP クライアントからこのタスクを実行する手順については、これらの手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。

サーバー SP でデフォルトネットワーク設定を変更するには、次のいずれかを実行します:

- サーバー SP でデフォルトネットワーク設定を変更する - Web による手順 1
- サーバー SP でデフォルトネットワーク設定を変更する - CLI による手順 2

1 デフォルトサーバー SP ネットワーク設定を変更する - Web による手順

a. 「ILOM Administration」 > 「Connectivity」 > 「Network」 をクリックします。

b. デフォルト IPv4 ネットワークオプションを変更するには、次のいずれかを実行します:

- デフォルトの「IPv4 DHCP Client ID」のプロパティ値 (None) を変更するには、「DHCP Client ID」リストボックスで「sysid」を選択します。
「sysid」が「DHCP Client ID」として指定されている場合、DHCP クライアント (ILOM SP) は固有のシステム識別ラベル (構成されている場合) を使用して DHCP アドレスを DHCP サーバーから取得します。「None」が「DHCP Client ID」として指定されている場合、DHCP クライアント (ILOM SP) はシステム MAC アドレスを使用して DHCP アドレスを取得します。

- 静的 IPv4 アドレスを割り当てるには、「Static IP」ラジオボタンをクリックして有効にし、静的 IPv4 アドレス、サブネットマスク、およびゲートウェイアドレスを指定します。

c. IPv6 ネットワークオプションを変更するには、次のいずれかまたは両方を実行します:

- **Autoconfig** オプション: IPv6 autoconfig オプションに関連付けられたチェックボックスをオンまたはオフにします。

- **Static IP Address:** 「Static IP Address」テキストボックスに、次の入力パラメータを入力して IPv6 アドレスとサブネットマスクアドレスを指定します:
`<IPv6_address>/<サブネットマスクアドレス長(ビット単位)>`
 例: fec0:a:8:b7:214:4fff:fece:5f7e/64

d. 「Save」をクリックして変更を適用します。

2 デフォルトサーバー SP ネットワーク設定を変更する -CLI による手順

- a. デフォルトの IPv4 `dhcp_clientid=none` プロパティを変更して値を `sysid` に設定するには、次のように入力します:

```
->set /SP/network dhcp_clientid=sysid
```

「sysid」が「DHCP Client ID」として指定されている場合、DHCP クライアント (ILOM SP) は固有のシステム識別ラベル (構成されている場合) を使用して DHCP アドレスを DHCP サーバーから取得します。「none」が「DHCP Client ID」として指定されている場合、DHCP クライアント (ILOM SP) はシステム MAC アドレスを使用して DHCP アドレスを取得します。

- b. デフォルトの IPv4 `dhcp` プロパティを変更して静的 IPv4 アドレスのプロパティ値を設定するには、次のように入力します:

```
-> set /SP/network pendingipdiscovery=static
```

```
-> set /SP/network pendingipaddress=<IPv4_address>
```

```
-> set /SP/network pendingipgateway=<gateway_address>
```

```
-> set /SP/network pendingipnetmask=<netmask_address>
```

- c. デフォルト IPv6 `autoconfig=stateless` プロパティを変更するには、`/network/ipv6` ターゲットに移動して次のいずれかまたは両方を実行します:

- デフォルト `autoconfig=stateless` プロパティ値を変更するには、次のように入力します: `-> set autoconfig=<property value>`

`<property value>` には、`stateless`

`stateless_only`、`dhcpv6_stateless`、`dhcpv6_stateful`、または `disable` のいずれかにかにできます。

- 静的 IPv6 アドレスを割り当てるには、次のように入力します: `-> set pendingipdiscovery=<IPv6 address>/<subnet mask length in bits>`

例: `-> set pendingipdiscovery=fec0:a:8:b7:214:4fff:fece:5f7e/64`

- d. すべての **pending static IPv4** または **IPv6** プロパティーの変更を保存するには、**/network** ターゲットに移動して次のように入力します:

-> **set commitpending=true**

参考 関連情報

- [44 ページの「初期設定の FAQ」](#)
- [18 ページの「管理対象デバイスの識別ラベルを設定する」](#)
- 『構成および保守』の「デフォルトの接続構成プロパティーの変更」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「Oracle ILOM での SNMP 設定の構成」

▼ リモート **KVMS** を使用してソフトウェアをインストールする

始める前に

- Oracle ILOM リモートコンソールは (SP Web インタフェースから利用できません)、次のデバイスのリモートリダイレクションを提供します: キーボード、ビデオ、マウス、およびストレージ。

Oracle ILOM でストレージデバイスをリダイレクトする代替方法として、Oracle ILOM Storage Redirection CLI を使用できます。この機能を使用する手順については、この手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。

- Oracle ILOM リモートコンソールを操作するには、Console (c) 役割権限が必要です。
- ローカルシステムに Java Runtime Environment (1.5 以降) がインストールされている必要があります。

SP Web インタフェースから Oracle ILOM リモートコンソールを起動するには:

- 1 **Oracle ILOM** で提供されるデフォルト **KVMS** 設定が使用しているデスクトップ環境と一致することを確認します:
 - a. **Web** インタフェースのナビゲーションペインで、「**Remote Control**」 > 「**KVMS**」をクリックします。

注 - このセクションの手順では、システムを設定したあとに Oracle ILOM から実行することが推奨される日常的な管理タスクの一部について概要を説明します。これらのタスクの実行に詳細な説明が必要な場合、「関連情報」セクションに記載されているガイドを参照してください。

▼ システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する

システム状態を監視したり未解決の問題を表示したりするために、Oracle ILOM CLI または Web インタフェースを使用できます。

- システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する - Web による手順 1
- システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する - CLI による手順 2

1 システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する - Web による手順

- a. **SP** または **CMM** の **Web** インタフェースからシステムステータスをチェックするには、「**System Information**」 > 「**Summary**」をクリックします。

「Status」テーブルに表示されるサブシステムステータスメッセージを確認します。

- b. すべての未解決の問題を表示するには、「**System Information**」 > 「**Open Problems**」をクリックします。

システムに未解決の問題が存在する場合、問題の詳細な説明が「Open Problems」表に表示されます。

該当する場合は、メッセージ内の URL リンクをクリックすると、問題の詳細とシステム管理者に推奨される訂正処置が表示されます。

注 - Oracle ILOM は、サーバーコンポーネントまたは CMM 現場交換可能ユニット (FRU) の交換または修復が検出されると、「Open Problems」表内のメッセージを自動的にクリアします。

注 - 「Open Problems」表に表示される CMM 顧客交換可能ユニット (CRU) のメッセージは、訂正保守処置を実行したあとは手動でクリアするようにしてください。手順は、この手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。

- 2 システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する - CLI による手順
 - a. /SP または /CMM CLI ターゲットからシステムステータスをチェックするには、次のように入力します:
-> **show /System**
「Properties」で健全性の詳細を確認します。
 - b. 報告されたサブシステムの問題の表出力を表示するには、次のように入力します:
-> **show /System/Open_Problems**
システムに未解決の問題が存在する場合、問題の詳細な説明が「Open Problems」表出力に表示されます。
該当する場合は、未解決の問題のメッセージに表示される URL を参照すると、問題の詳細とシステム管理者に推奨される訂正処置が表示されます。

参考 関連情報

- [25 ページの「障害メッセージを手動でクリアする」](#)
- 『ユーザーズガイド』の「Oracle ILOM 管理対象デバイスのトラブルシューティング」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「システム電源の監視と管理 (SNMP)」
- Sun Blade モジュラーシステムサービスマニュアルのコンポーネントタイプとサービス分類

▼ 障害メッセージを手動でクリアする

始める前に

- 障害が発生している状態とは、Oracle ILOM 障害マネージャーによって1つ以上の問題が診断されているために、コンポーネントは存在するけれども使用できないか機能低下していることを示します。システムに対する追加の損害を回避するために、コンポーネントは無効にされています。
- Oracle ILOM 障害マネージャーは、「Open Problems」表内の、交換または修復された SPARC サーバーコンポーネント、x86 サーバーコンポーネント、および CMM 現場交換可能ユニット (FRU) の障害メッセージを自動的にクリアします。
- Oracle ILOM 障害マネージャーは、「Open Problems」表内の、交換または修復された CMM 顧客交換可能ユニット (CRU) の障害メッセージを自動的にクリアしません。
- この手順を実行するには Admin (a) 役割権限が必要です。

Oracle ILOM 障害管理シェルを起動して「Open Problems」表に表示されている障害メッセージを手動でクリアするには:

注-一部のSunサーバーおよびCMMでは、レガシー Oracle ILOM 3.0 CLI /SYS ターゲットを使用して障害メッセージをクリアすることもできます。手順は、この手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。

- 1 Oracle サービスに問い合わせた障害管理シェルを使用する許可を取得します。

Oracle ILOM 障害管理シェルは Oracle の保守担当者がシステムの問題を診断するのに役立ちます。Oracle の保守担当者からそのようにリクエストされないかぎり、障害管理シェルでコマンドを実行しないようにしてください。

- 2 SP または CMM CLI から障害管理シェルを起動するには、次のいずれかを入力します:

```
start /SP/faultmgmt/shell
```

```
start /CMM/faultmgmt/shell
```

障害管理シェルコマンドプロンプト (faultmgmtsp>) が表示されます。

注-障害管理シェルを開始してから障害管理シェルを終了するまでは、障害管理シェル固有のコマンドのみを実行できます。サポートされている障害管理シェルコマンドを表示するには、help と入力します。

- 3 障害管理シェルプロンプトから障害状態を管理するには、次のように入力します:

```
fmadm <sub-command>
```

fmadm は、Oracle ILOM 障害マネージャーで保守される障害状態を表示したり変更したりできる、障害管理構成ツールです。

注-障害管理構成ツールから障害が発生したコンポーネントのリストを表示するには、fmadm faulty と入力します。

- 4 障害が発生したサブシステムコンポーネントのメッセージを手動でクリアするには、次のいずれかのサブコマンドを発行します:

注-<FRU|CRU> は障害が発生したコンポーネントの名前に置き換えてください。<UUID> は割り当てられた汎用一意識別子に置き換えてください。構文例は、次のサブコマンド表のあとの例を参照してください。

サブコマンド	説明
acquit <FRU CRU>	障害が発生した特定のコンポーネントを障害と見なさず無視しても問題がないことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。fmadm acquit サブコマンドは、書面に記載された Sun ハードウェア修復手順に指示があった場合にのみ使用するよう to してください。
acquit <UUID>	UUID で識別される障害イベントを無視しても問題がないことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。fmadm acquit サブコマンドは、書面に記載された Sun ハードウェア修復手順に指示があった場合にのみ使用するよう to してください。
acquit <UUID> <FRU CRU>	UUID で識別される障害イベントで、または、UUID が指定されない場合は検出されたすべての障害で、指定されたコンポーネントが障害と見なさないことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。fmadm acquit サブコマンドは、書面に記載された Sun ハードウェア修復手順に指示があった場合にのみ使用するよう to してください。
replaced <FRU CRU>	指定されたコンポーネントで交換手順が実行されたことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。fmadm replaced サブコマンドは、書面に記載された Sun ハードウェア修復手順に指示があった場合にのみ使用するよう to してください。
repaired <FRU CRU>	指定されたコンポーネントで修復手順が実行されたことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。fmadm repaired サブコマンドは、書面に記載された Sun ハードウェア修復手順に指示があった場合にのみ使用するよう to してください。
repaired <UUID>	指定された UUID に関連付けられた障害で修復手順が実行されたことを Oracle ILOM 障害マネージャーに通知します。fmadm repaired サブコマンドは、書面に記載された Sun ハードウェア修復手順に指示があった場合にのみ使用するよう to してください。

サブコマンド構文例:

- **fmadm repaired /SYS/MB/FM0**
- **fmadm repaired /SYS/PS1**
- **fmadm replaced /SYS/MB/FM0**
- **fmadm replaced /SYS/PS1**

注-訂正保守処置を完了する前に障害のあるコンポーネントのメッセージをクリアした場合、Oracle ILOM 障害マネージャーは障害を再度診断し、Oracle ILOM の「Open Problems」表に障害メッセージを再表示します。

- 5 障害管理シェルを終了するには、次のように入力します:

exit

注-標準の Oracle ILOM CLI コマンドを実行するには、まず障害管理シェルを終了する必要があります。

参考 関連情報

- 『ユーザーズガイド』の「Oracle ILOM 3.1 CLI のターゲットネームスペース」
- [24 ページの「システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する」](#)
- Sun サーバーのサービスマニュアルのコンポーネントタイプとサービス分類

▼ イベントを管理しログエントリを監査する

始める前に

- イベントログは、コンポーネントの追加や取り外し、コンポーネントの障害など、管理対象デバイスについての情報、警告、またはエラーメッセージを追跡します。ログに記録されるイベントのプロパティには、イベントの重要度、イベントプロバイダ(クラス)、イベントが記録された日付と時間などがあります。
- 監査ログは、ユーザーログイン、ログアウト、構成変更、パスワード変更など、インタフェース関連のすべてのユーザー操作を追跡します。ユーザー操作を監視するユーザーインタフェースには、Oracle ILOM Web インタフェース、CLI、障害管理シェル (captive shell)、制限付きシェル、SNMP および IPMI クライアントインタフェースが含まれます。
- Oracle ILOM でログエントリをクリアするには、Admin (a) 役割権限が必要です。

注-Oracle ILOM は、ログエントリのタイムスタンプを取り込む際に UTC/GMT タイムゾーンをデフォルトで使用します。

イベントおよび監査ログエントリを管理するには、次の手順のいずれかを実行します。

- イベントおよび監査ログエントリを管理する - Web による手順 1
- イベントおよび監査ログエントリを管理する - CLI による手順 2

- 1 イベントおよび監査ログエントリを管理する - Web による手順
 - a. SP または CMM の Web インタフェースでイベントまたは監査ログエントリを表示するには、「**ILOM Administration**」 > 「**Logs**」をクリックします。
デフォルトでは、イベントログが表示されます。監査ログを表示するには、「**Audit**」タブをクリックします。
 - b. 表示されるイベントタイプをフィルタリングしたり、行やページの表示プロパティを制御したりするには、ログ表上部のコントロールを使用します。
 - c. 表に表示されているすべてのログエントリをクリアするには、「**Clear Log**」をクリックします。
確認のダイアログが表示されます。確認ダイアログで「**OK**」をクリックすると、エントリがクリアされます。
- 2 イベントおよび監査ログエントリを管理する - CLI による手順
 - a. SP または CMM の CLI からログエントリを一覧表示するには、次のいずれかを実行します。
 - イベントログの場合は、次のいずれかを入力します：
`show /SP/Logs/event/list`
`show /CMM/Logs/event/list`
 - 監査ログの場合は、次のいずれかを入力します：
`show /SP/Logs/audit/list`
`show /CMM/Logs/audit/list`リストをスクロールするには、q キー以外の任意のキーを押します。
 - b. ログ出力をフィルタリングするには、`show` コマンドを使用してフィルタプロパティの1つ以上の値 (**Class**、**Type**、**Severity**) を指定します。
例:
 - 1つのフィルタプロパティ、たとえば **Class** を使用します：
`show /SP|CMM/logs/event|audit/list Class==value`
 - 2つのフィルタプロパティ、たとえば **Class** と **Type** を使用します：
`show /SP|CMM/logs/event|audit/list Class==value Type==value`
 - すべてのフィルタプロパティ (**Class**、**Type**、および **Severity**) を使用します：
`show /SP|CMM/logs/event|audit/list Class==value Type==value Severity==value`

SP|CMMには、SPまたはCMMと入力します。

- c. 表示されているすべてのログエントリをクリアするには、**clear=true** コマンドを使用します。

例:

```
set /SP|CMM/logs/event|audit clear=true
```

event|auditには、eventまたはauditのいずれかを入力します。

プロンプトが表示されたら、操作を確定する場合は**y**と入力し、操作を取り消す場合は**n**と入力します。

参考 関連情報

- 『ユーザーズガイド』の「Oracle ILOM のログエントリの管理」
- 『構成および保守』の「イベントログ用の Syslog の構成」
- 『構成および保守』の「SP または CMM クロックのプロパティの設定」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「Oracle ILOM イベントログを表示および消去する」

▼ 管理対象デバイスの消費電力メトリックを表示する

始める前に

- 実電力消費メトリックは、管理対象デバイスが現在消費している入力電力ワット数を示します。ピーク許容電力消費メトリックは、管理対象デバイスが消費できる最大電力ワット数を示します。
- ターゲット制限消費電力メトリック (有効になっている Sun SPARC サーバーでのみ利用可能) は、Sun SPARC 管理対象デバイスが消費できる、ユーザー定義の電力ワット数 (またはパーセンテージ制限) を示します。
- 管理対象デバイス用の消費電力イベント通知を作成したり、SPARC サーバーでの電力制限を有効にしたりするには、これらの手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。

始める前に CLI または Web インタフェースから管理対象デバイスの電力ワット数メトリックを監視するには、次の手順のいずれかを実行します:

- 消費電力を監視する - Web による手順 1
- 消費電力を監視する - CLI による手順 2

1 消費電力を監視する -Web による手順

- a. SP または CMM の Web インタフェースから消費電力メトリックを表示するには、「Power Management」 > 「Consumption」をクリックします。

管理対象デバイスの消費電力ワット数値が「Actual Power」および「Peak Permitted Power」プロパティに表示されます。

管理対象デバイスが Sun SPARC サーバーの場合は、「Target Limit」の消費電力ワット数またはパーセンテージ値がその他の消費電力メトリックに加えて表示されます (事前に有効にしていた場合)。

- b. シャーシ内の各ブレードサーバーの実消費電力ワット数を CMM Web インタフェースから表示するには、「Power Consumption」ページの「Actual Power Details」リンクをクリックします。

注 - 消費電力を監視する機能は、この機能の Sun サーバー実装によって異なります。サーバー固有の Oracle ILOM 電源管理動作のさまざまなトピックについては、Sun ハードウェア管理ガイドまたは Oracle ILOM 補足ガイドを参照してください。

2 消費電力を監視する -CLI による手順

- a. SP または CMM の CLI から消費電力メトリックを表示するには、次のいずれかを実行します:

- SP CLI の場合は、次のように入力します: `show /SP/powermgmt actual_power`
`show /SP/powermgmt permitted_power`

管理対象デバイスが Sun SPARC サーバーで、電力制限が有効になっている場合は、次のように入力します:

```
show /SP/powermgmt target_limit
```

- CMM CLI の場合は、次のように入力します: `show /CMM/powermgmt actual_power`
`show /CMM/powermgmt permitted_power`

参考 関連情報

- 『構成および保守』の「消費電力警告通知の設定」
- 『構成および保守』の「電力制限を実施するための SP 詳細電力上限ポリシーの設定」
- 『ユーザーズガイド』の「消費電力の用語とプロパティ」

- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「消費電力インタフェースの監視 (SNMP)」

▼ 管理対象デバイスの電力割り当てを表示する

始める前に

- Oracle ILOM の電力割り当てプランは、管理対象デバイスの電力割り当て要件を表示します。たとえば:
 - **System Power Specification** – 「System Power Specification」表は、管理対象デバイスで設定されている消費電力プロパティに割り当てられた電力ワット数を示します。
 - **Per Component Power Map** – 「Component Power Map table」表は、Sun ラック搭載型サーバーの場合に利用でき、管理対象デバイスの各コンポーネントに割り当てられた電力ワット数を示します。コンポーネントに設定されている電力上限、またはコンポーネントに電力上限を設定できるかどうかを示します。
 - **Blade Power Map** – 「Blade Power Map」表は、Sun CMM にのみ利用でき、ブレードサーバーに付与されている総ワット数と、ブレードサーバーへの付与要求のうち満たされていない総ワット数を示します。
- 管理対象デバイスの電力割り当ては、Web インタフェース、CLI、または SNMP インタフェースから表示できます。SNMP クライアントからこのタスクを実行する手順については、これらの手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。

Web インタフェースまたは CLI から管理対象デバイスの電力割り当てを監視するには、次のいずれかの手順を実行します。

- 電力割り当てを表示する - Web による手順 1
- 電力割り当てを表示する - CLI による手順 2

1 電力割り当てを表示する - Web による手順

- a. Oracle ILOM SP の Web インタフェースで、「Power Management」> 「Allocations」をクリックします。
- b. 「Power Allocation Plan」ページで、管理対象デバイスに表示される電力割り当て要件を表示します。

2 電力割り当てを表示する - CLI による手順

a. 管理対象デバイスに割り当てられた電力の合計を表示するには、次のいずれかを実行します:

- サーバー SP から、次のように入力します:

```
show /SP/powermgmt/budget
```

- CMM から、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt grantable_power
```

- または -

ブレードスロットに割り当てられている電力の合計を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt allocated_power
```

b. 管理対象デバイスのコンポーネント (ファン、CPU など) に割り当てられた電力ワット数を表示するには、次のいずれかを実行します:

- サーバー SP から、次のように入力します:

```
show /SP/powermgmt/powerconf/component_type/component_name
```

- CMM から、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/powerconf/component_type/component_name
```

- または -

すべてのブレードスロットに付与されている電力の合計 (またはすべての自動送電 I/O ブレードスロットに予約された電力の合計) を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslots
```

- または -

個々のブレードサーバーに付与されている電力の合計を表示するには、次のように入力します:

```
show /CMM/powermgmt/powerconf/bladeslot/BLn
```

component_type はコンポーネントカテゴリの名前、*component_name* はコンポーネントの名前、*n* はブレードスロットの番号です。

参考 関連情報

- 『ユーザーズガイド』の「管理対象デバイスの電力割り当て計画を表示する」
- 『ユーザーズガイド』の「消費電力の用語とプロパティ」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「消費電力インタフェースの監視 (SNMP)」

▼ Sun SPARC の電力管理ポリシーを設定する

始める前に

- *performance* 電力ポリシーオプションによって、Sun SPARC 管理対象サーバーは許可されている利用可能なすべての電力を消費し、最大速度で動作できます。
- *elastic* 電力ポリシーオプションは、Sun SPARC 管理対象サーバーの消費電力使用率を現在の電力使用レベルに合わせて調整します。
たとえば、*elastic* 電力ポリシーオプションが有効になっているときは、Oracle ILOM はサーバーコンポーネントの速度を調整したり、休眠状態にしたり、休眠状態を解除したりすることで、相対的な電力使用率を常に (サーバーのワークロードが変動する場合でも) 70 パーセントに維持します。
- Sun SPARC 管理対象サーバーの電力ポリシー設定を変更するには、Oracle ILOM の Administrator (a) 役割権限が必要です。
- Sun SPARC 管理対象サーバーの電力ポリシーは、Web インタフェース、CLI、または SNMP インタフェースから管理できます。SNMP クライアントからこれらのタスクを実行する手順については、これらの手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。

CLI または Web インタフェースから Sun SPARC 管理対象サーバーの電力ポリシーを設定するには、次の手順のいずれかを実行します:

- Sun SPARC の電力ポリシーを設定する - Web による手順 1
- Sun SPARC の電力ポリシーを設定する - CLI による手順 2

1 Sun SPARC の電力ポリシーを変更する - Web による手順

- a. Sun SPARC サーバー SP Web インタフェースから電力ポリシープロパティを表示するには、「**Power Management**」 > 「**Settings**」をクリックします。
「Power Management」ページが表示されます。
- b. Sun SPARC 管理対象デバイスの電力ポリシーで設定されているプロパティ値を変更するには、*Performance*、*Elastic*、または *Disabled* のいずれかのオプションを選択します。
- c. 「**Save**」をクリックして、「**Power Policy**」設定を保存します。

2 Sun SPARCの電力ポリシーを変更する - CLIによる手順

- a. Sun SPARC サーバー SP CLI から電力ポリシープロパティを表示するには、次のように入力します:

```
-> show /SP/powermgmt policy
```

- b. Sun SPARC 管理対象サーバーの電力ポリシーに設定されているプロパティ値を変更するには、次のように入力します:

```
-> set /SP/powermgmt policy=performance|elastic
```

performance|elastic の値が表示されたら、*performance*、*elastic*、または *disabled* のいずれかを入力します。

プロンプトが表示されたら、操作を確定する場合は **y** と入力し、操作を取り消す場合は **n** と入力します。

参考 関連情報

- 『構成および保守』の「システム管理ポリシー構成の設定」
- 『ユーザズガイド』の「消費電力の用語とプロパティ」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「システムの電力ポリシーを管理する (SNMP)」

▼ 消費電力の統計と履歴を表示する

始める前に

- Oracle ILOM の電力統計には、15、30、60 秒間隔で管理対象デバイスの直近の電力使用率が表示されます。管理対象デバイスの電力使用量 (ワット数) のピーク時の日時も表示されます。
- Oracle ILOM の電力履歴には、管理対象デバイスの最後の 1 時間または 14 日間の最小、平均、および最大電力使用率が表示されます。管理対象デバイスの電力使用量 (ワット数) のピーク時の日時も表示されます。
- Oracle ILOM の消費電力統計および履歴データは、サーバー SP Web インタフェース、CMM Web インタフェース、および CMM CLI から表示できます。これらはサーバー SP CLI からは表示できません。

Web インタフェースまたは CLI から管理対象デバイスの消費電力統計および履歴を表示するには、次のいずれかの手順を実行します:

- 電力統計および履歴を表示する - Web による手順 1
- 電力統計および履歴を表示する - CLI による手順 2

- 1 電力統計および履歴を表示する - Web による手順
 - a. SP または CMM Web インタフェースから消費電力統計を表示するには、「Power Management」 > 「Statistics」をクリックします。

管理対象デバイスの電力使用統計が 15、30、60 秒間隔で表示されます。

また、CMM 電力統計表示の場合のみ、シャーシ電力使用率とブレードサーバー電力使用率の間で表示を切り替えることができます。
 - b. SP または CMM Web インタフェースから電力履歴を表示するには、「Power Management」 > 「History」をクリックします。

管理対象デバイスの最小、平均、および最大電力使用率の電力履歴が表示されません。

1 時間と 14 日間の間で表示を切り替えることができます。

CMM 電力履歴表示の場合のみ、シャーシ電力使用率とブレードサーバー電力使用率の間で表示を切り替えることができます。
- 2 電力統計および履歴を表示する - CLI による手順

- a. CMM CLI から電力統計を表示するには、次のいずれかを入力します:

```
show /CH/VPS/history
```

```
show /CH/VPS/history/0/list
```

- b. CMM CLI から電力履歴を表示するには、次のように入力します:

```
show /CH/VPS/history/1/list
```

参考 関連情報

- 『ユーザーズガイド』の「電力使用統計情報の分析」

通常の保守タスク

- 37 ページの「管理対象デバイスのシステム情報を収集する」
- 37 ページの「「Locator」 LED を使用して管理対象デバイスを探す」
- 39 ページの「管理対象デバイスの電源状態を変更する」
- 40 ページの「管理対象デバイスの Oracle ILOM をリセットする」
- 41 ページの「管理対象デバイスのファームウェアを更新する」
- 43 ページの「リモートシリアルコンソールからホスト OS にログインする」

▼ 管理対象デバイスのシステム情報を収集する

管理対象デバイスのシステム情報(パーツ番号、シリアル番号、システムステータス、ファームウェアバージョンなど)を収集するために、CLIまたはWebインタフェースを使用できます。

- 管理対象デバイスのシステム情報を収集する - Web による手順 1
- 管理対象デバイスのシステム情報を収集する - CLI による手順 2

1 システム情報を収集する - Web による手順

- a. **SP**または**CMM Web**インタフェースで、「**System**」>「**Summary**」をクリックします。
「**Summary**」ページが表示されます。
- b. 「**General Information**」表で、パーツ番号、シリアル番号、およびファームウェアバージョンのプロパティ値を検索して記録します。
- c. 「**Status**」表の上部で、「**Overall Status**」に表示されているステータスの状態と「**Total Problem Count**」に表示されている値を検索して記録します。

2 システム情報を収集する - CLI による手順

- **SP**または**CMM CLI**で管理対象デバイスの健全性の状態、健全性の詳細、パーツ番号、シリアル番号、またはファームウェアバージョンを表示するには、次のように入力します:

```
show /System
```

注 - 一部の Sun サーバーおよび CMM では、レガシー Oracle ILOM 3.0 CLI /SYS ターゲットを使用して、健全性ステータス、パーツ番号、シリアル番号、およびファームウェアバージョンを表示することもできます。

参考 関連情報

- [24 ページの「システムステータスをチェックして未解決の問題を表示する」](#)
- [25 ページの「障害メッセージを手動でクリアする」](#)
- [28 ページの「イベントを管理しログエントリを監査する」](#)

▼ 「Locator」LED を使用して管理対象デバイスを探す

始める前に

- Oracle ILOM で「Locator」インジケータ設定を変更するには、User Management (u) 役割権限が必要です。
- 管理対象デバイスの「Locator」LED は通常、デバイスのフロントパネルとバックパネルの両方にあります。

データセンター内の多くのサーバーや CMM から Sun サーバーまたは CMM を探すには、Oracle ILOM CLI または Web インタフェースから管理対象デバイスの「Locator」LED を点灯できます。

- 「Locator」インジケータの状態を変更する - Web による手順 1
- 「Locator」インジケータの状態を変更する - CLI による手順 2

1 「Locator」インジケータの状態を変更する - Web による手順

- a. SP または CMM の Web インタフェースで、「System Information」 > 「Summary」をクリックします。

「Summary」ページが表示されます。

- b. 管理対象デバイスの「Locator」LED をオンまたはオフにするには、「Actions」パネルの「Locator Indicator」ボタンをクリックします。操作を確定を求めるメッセージが表示されます。

- c. 操作を確定するために、進む場合は「Yes」をクリックし、取り消す場合は「No」をクリックします。

Oracle ILOM が、「Actions」パネルの「Locator Indicator」プロパティの状態を更新します。

2 「Locator」インジケータの状態を変更する - CLI による手順

- サーバー SP または CMM から「Locator」LED を点灯させるには、次のように入力します:

```
-> set /System/LOCATE value=fast_blink
```

操作を確定する場合は **y** と入力し、操作を取り消す場合は **n** と入力します。

- サーバー SP または CMM から「Locator」LED を無効にするには、次のように入力します:

```
-> set /System/LOCATE value=off
```

操作を確定する場合は **y** と入力し、操作を取り消す場合は **n** と入力します。

参考 関連情報

- 『ユーザーズガイド』の「Oracle ILOM 管理対象デバイスのトラブルシューティング」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「SNMP の概要」

▼ 管理対象デバイスの電源状態を変更する

始める前に

- 管理対象デバイスの電源状態を変更するには、Admin (a) 役割権限が必要です。

サーバー SP または CMM の電源状態を変更するには、Oracle ILOM CLI または Web インタフェースを使用できます。

- 管理対象デバイスの電源状態を変更する - Web による手順 1。
- 管理対象デバイスの電源状態を変更する - CLI による手順 2。

1 管理対象デバイスの電源状態を変更する - Web による手順

- a. SP または CMM Web インタフェースで、「Host Management」->「Power Control」をクリックします。

「Power Control」ページが表示されます。

注: CMM の場合のみ、「Remote Power Control」表に一覧表示されているシャーシデバイスの横のラジオボタンをクリックします。

- b. 管理対象デバイスの電源状態を設定するには、次のオプションのいずれかを選択します:

- **Reset** - この SP 固有オプションは、システムコンポーネント (ディスクドライブなど) に供給される電力を維持しながら、管理対象サーバーの電源を再投入します。
- **Graceful Reset** - この SPARC SP 固有オプションは、ホスト OS を正常にシャットダウンしてから、管理対象 SPARC サーバーの電源を再投入します。
- **Immediate Power Off** - このオプションは管理対象デバイスの電源をただちに切断します。
- **Graceful Shutdown and Power Off** - このオプションは、OS の電源を正常に切断してから、管理対象デバイスの電源を切断します。
- **Power On (デフォルト設定)** - このオプションは管理対象デバイスの電源を完全に投入します。

- **Power Cycle** – このオプションは管理対象デバイスの電源を切断してから、管理対象デバイスの電源を完全に投入します。
- 2 管理対象デバイスの電源状態を変更する - CLI による手順
- SP または CMM CLI から管理対象デバイスの電源状態を設定するには、次のいずれかを実行します:
- **Reset** – システムコンポーネント (ディスクドライブなど) に供給される電力を維持しながら、管理対象 x86 サーバーまたはブレードシステムシャーシの電源を再投入するには、次のように入力します:
reset /System
管理対象 SPARC サーバーの電源を再投入するには、次のように入力します:
reset -force /System
 - **Graceful Reset (SPARC SP のみ)** – ホストオペレーティングシステムの電源を正常にシャットダウンしてから SPARC サーバーの電源を再投入するには、次のように入力します:
reset /System
 - **Immediate Power Off** – 管理対象サーバーまたはブレードシステムシャーシの電源をただちに切断するには、次のように入力します:
stop -force /System
 - **Graceful Shutdown and Power Off** – OS を正常にシャットダウンしてから管理対象サーバーまたはブレードシステムシャーシの電源を切断するには、次のように入力します:
stop /System
 - **Power On (デフォルト設定)** – 管理対象サーバーまたはブレードシステムシャーシの電源を完全に投入するには、次のように入力します:
start /System

参考 関連情報

- 『構成および保守』の「SP 電力制限および CMM 電力許可プロパティの設定」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「システム電源の監視と管理 (SNMP)」

▼ 管理対象デバイスの Oracle ILOM をリセットする

始める前に

- サーバー SP または CMM で Oracle ILOM をリセットするには、Reset and Host Control (r) 権限が必要です。
- 管理対象デバイスの Oracle ILOM をリセットしても、オペレーティングシステムには影響しません。
- サーバー SP または CMM で Oracle ILOM をリセットすると、現在の Oracle ILOM セッションが切断され、リセット処理が完了するまで管理接続が管理不可能になります。

CLI または Web インタフェースを使用して、SP または CMM の Oracle ILOM をリセットできます。

- Oracle ILOM SP または CMM をリセットする - Web による手順 1
- Oracle ILOM SP または CMM をリセットする - CLI による手順 2

1 Oracle ILOM SP または CMM をリセットする - Web による手順

サーバー SP または CMM Web インタフェースから Oracle ILOM をリセットするには、次のいずれかを実行します:

- サーバー SP の場合、「System Information」 > 「Maintenance」 > 「Reset SP」をクリックし、「Reset」ボタンをクリックします。
- CMM の場合、「System Information」 > 「Maintenance」 > 「Reset Components」をクリックし、表から適切なシャーシコンポーネントを選択して「Reset」ボタンをクリックします。

2 Oracle ILOM SP または CMM をリセットする - CLI による手順

Oracle ILOM サーバー SP、CMM、またはブレード SP をリセットするには、次のいずれかを入力します:

```
reset /SP
```

```
reset /CMM
```

```
reset /Servers/BLades/BLn/SP
```

参考 関連情報

- 『構成および保守』の「サービスプロセッサまたはシャーシ監視モジュールの電源のリセット」

▼ 管理対象デバイスのファームウェアを更新する

始める前に

- プラットフォームが必要とする場合は、サーバー SP のファームウェアイメージを更新する前に、ホストオペレーティングシステムをシャットダウンします。
- Sun サーバー SP または CMM のファームウェアを更新するには、Admin (a) 役割権限が必要です。
- ファームウェア更新処理は、Web インタフェース、CLI、または SNMP クライアントから開始できます。

このセクションの手順では、Web インタフェースおよび CLI からファームウェア更新処理を開始する方法について説明します。SNMP クライアントを使用してこのタスクを実行する方法、またはモジュラーシャーシシステムのファームウェア更新を管理する方法については、これらの手順のあとの「関連情報」セクションを参照してください。
- ファームウェア更新処理の完了には、数分かかります。この間、ほかの Oracle ILOM タスクを実行しないでください。ファームウェア更新が完了すると、システムがリブートします。

SP または CMM の CLI または Web インタフェースからファームウェア更新処理を開始するには:

- 1 サーバー SP または CMM にインストールされている現在のファームウェアバージョンを判定します。
 - Web インタフェースの場合、「System Information」 > 「Summary」をクリックし、「General Information」表の「System Firmware Version」のプロパティ値を表示します。
 - CLI の場合、コマンドプロンプトで次のように入力します: `version`

ファームウェアバージョンを特定するために使用される番号付けスキームの詳細は、7 ページの「Oracle ILOM 3.1 ファームウェアのバージョン番号方式」を参照してください。
- 2 新しい Web ブラウザタブまたはウィンドウを開き、次のサイトに移動して Oracle ILOM ファームウェアイメージをダウンロードします。

<http://support.oracle.com/>

「My Oracle Support」 Web サイトからソフトウェアの更新をダウンロードする方法の詳細は、6 ページの「製品のダウンロード」を参照してください。

注- 管理対象デバイスのシステムファームウェアイメージを以前のファームウェアリリースに更新することは推奨されません。ただし、以前のファームウェアリリースが必要な場合、Oracle ILOM はダウンロードサイトから入手できる以前のファームウェアリリースへのファームウェア更新処理をサポートします。

- 3 TFTP、FTP、HTTP、HTTPS プロトコルのいずれかをサポートするサーバーにファームウェアイメージを配置します。

- Web インタフェースでファームウェアを更新する場合は、Oracle ILOM Web ブラウザが動作しているシステムにイメージをコピーします。
 - CLI でファームウェアを更新する場合は、ネットワークからアクセスできるサーバーにイメージをコピーします。
- 4 **SP** または **CMM Web** インタフェースから **Oracle ILOM** ファームウェアイメージを更新するには、「**ILOM Administration**」 > 「**Maintenance**」 > 「**Firmware Upgrade**」をクリックし、「**Enter Upgrade Mode**」をクリックします。
- ファームウェア更新ダイアログの使用の詳細な手順については、『Oracle ILOM 3.1 構成および保守』を参照してください。
- 5 **Oracle ILOM** サーバー **SP** または **CMM CLI** から **Oracle ILOM** ファームウェアイメージを更新するには、次のように入力します:
- ```
-> load -source supported_protocol://server_ip/path_to_firmware_image/ filename.xxx
```
- CLI ファームウェア更新プロンプトの使用の詳細な手順については、『Oracle ILOM 3.1 構成および保守』を参照してください。
- 6 システムのリブート後に、適切なファームウェアバージョンがインストールされたことを確認してください。

#### 参考 関連情報

- 『構成および保守』の「サーバー SP または CMM のファームウェアイメージを更新する」
- 『構成および保守』の「ブレードシャーシコンポーネントのファームウェアイメージを更新する」
- 『SNMP、IPMI、CIM、WS-MAN プロトコル管理』の「Oracle ILOM ファームウェア更新の管理 (SNMP)」

## ▼ リモートシリアルコンソールからホスト OS にログインする

始める前に

- Oracle ILOM CLI からリモートシリアルコンソールを起動するには、console (c) 権限が必要です。さらに、ホストサーバーのオペレーティングシステムにアクセスするにはユーザー資格も必要です。
- ホストサーバーの電源状態は電源が入っている必要があります。

Oracle ILOM SP CLI からホストサーバーのオペレーティングシステム (OS) にログインするには:

- 1 次を入力します:

**start /host/console**

ユーザー資格を指定するように促すメッセージが表示されます。

- 2 ホストサーバー OS へのアクセスに必要なユーザー資格を入力します。  
これで、リモートシリアルコンソールを介してホストサーバー OS にログインしました。

---

注 - 標準の Oracle ILOM CLI コマンドを実行するには、まずリモートシリアルコンソールを終了する必要があります。

---

- 3 リモートシリアルコンソールを終了するには、**ESC** キーと (キーを押します)。

#### 参考 関連情報

- [22 ページの「リモート KVMS を使用してソフトウェアをインストールする」](#)
- [39 ページの「管理対象デバイスの電源状態を変更する」](#)
- 『構成および保守』の「リモート KVMS コンソールを使用したホストサーバーのリダイレクション」

## 初期設定の FAQ

質問: Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) は自動的にブートしますか。

回答: Oracle ILOM サービスプロセッサは、電源ケーブルが Sun サーバーまたは CMM に接続されたときに自動的にブートします。電源ケーブルをシステムシャーシまたはラックマウントサーバーに接続する方法の詳細は、ラックマウントサーバーまたはシステムシャーシに付属しているハードウェア設置ドキュメントを参照してください。

質問: シリアルコンソールまたは端末を管理対象デバイスに接続するためのドキュメントはどこにありますか。

回答: Oracle Sun サーバーまたは CMM ハードウェア設置ガイドを参照してください。

質問: Oracle ILOM に root アカウントはありますか。

回答: Oracle ILOM は、事前構成済み root アカウント付きで工場から出荷されます。最初のログインおよびユーザーアカウントの最初のセットアップには、事前構成済み root アカウントを使用することをお勧めします。

管理対象デバイスへの承認されていないアクセスを防止するために、各サービスプロセッサ (SP) またはシャーシ監視モジュール (CMM) で事前構成済み root アカウント (ログイン: **root** パスワード: **changeme**) を変更することをお勧めします。

質問: **Oracle ILOM** で受け入れられる **IPv4** および **IPv6** ネットワークアドレスはどのような形式ですか。

回答: Oracle ILOM がデュアルスタックネットワーク環境で動作している場合は、IPv4 または IPv6 アドレス形式を使用して IP アドレスを入力できます。

例:

- IPv4 形式: 10.8.183.106
- IPv6 形式: fec0:a:8:b7:214:4fff:5eca:5f7e/64

質問: **Oracle ILOM** に出荷時のデフォルト設定はありますか。

回答: ほとんどの Oracle ILOM システム管理機能に出荷時のデフォルト設定があります。これらのデフォルト設定を使用するか、要件に合わせてカスタマイズできます。Oracle ILOM 3.1 に設定されている出荷時のデフォルト設定のリストについては、10 ページの「**出荷時のデフォルト設定**」を参照してください。

質問: どの **Oracle ILOM** ユーザーインターフェースを使用したらよいですか。

回答: ほとんどすべての Oracle ILOM 機能は、Web インタフェースとコマンド行インタフェース (CLI) の両方から使用できます。Oracle ILOM 機能の一部は、SNMP インタフェース、IPMI インタフェース、および CIM WS-Management インタフェースからも使用できます。SNMP、IPMI、および CIM WS-Management からサポートされる Oracle ILOM 機能の詳細は、『Oracle ILOM 3.1 プロトコル管理リファレンス』を参照してください。

質問: **Oracle ILOM** に対するネットワーク管理接続を確立できません

回答: Oracle ILOM に対する接続に問題が発生している場合、接続の問題を解決するには、次の推奨される解決案を参照してください:

- 使用しているネットワークと Sun サーバーまたは CMM NET 上の MGT ポートとの間に、物理的なイーサネット接続が確立していることを確認します。
- Oracle ILOM に対するローカル (ネットワークを介さない) 接続で、デュアルスタックネットワーク環境について、IPv4 の状態が有効か、IPv4 および IPv6 の両方の状態が有効かを確認します。
- Ping のようなコマンド行ネットワークツールを使用して、ネットワークへの接続を確認します。
- IPv6 管理接続の場合、URL 内の IPv6 アドレスが角括弧で囲まれていることを確認します。

例:

- Web インタフェースの URL 形式:  
https://[fe80::221:28ff:fe77:1402]
- CLI ダウンロードファイルの URL 形式:  
-> **load -source** tftp://[fec0:a:8:b7:214:rfff:fe01:851d]desktop.pkg

質問:**root** アカウントを誤って事前に削除した場合、どのようにして再作成できますか。

回答: Oracle ILOM の「Preboot」メニューを使用して、x86 Sun サーバーで用意されている Oracle ILOM root アカウントを回復できます。手順については、ILOM 3.1 を使用するサーバー向けの x86 診断ガイドを参照してください。

SP または CMM を出荷時デフォルトにリセットすることで、サーバー SP または CMM の Oracle ILOM root アカウントを回復することもできます。Web インタフェースで、「ILOM Administration」>「Configuration Management」>「Reset Defaults」をクリックします。デフォルトを出荷時にリセットすると、すべてのログファイルが削除され、すべての構成プロパティがデフォルト値に戻ります。

Oracle ILOM で用意されている root アカウントの回復についての詳細は、Oracle の保守担当者に問い合わせてください。

質問: **Oracle ILOM 3.1** にはどのような最新機能がありますか。

回答: 『Oracle ILOM 3.1 機能更新およびリリースノート』には、各 Oracle ILOM 3.1 ファームウェアのポイントリリースについて新しい機能が説明されています。